

## ●ブログ「古田史学の継承のために」議論の記録 10

2017年6月12日(月)

### 「副都説への疑問」(二)「悪魔の証明」について(大下さん)

「副都説への疑問」(二)「悪魔の証明」について

洛中洛外日記第1404話「副都説反対論者の問い(7)」で古賀氏は“上町台地に難波・難波津がなかった”ことを証明するのは不可能。それは「悪魔の証明」である“と記しています。

この言葉は「森友学園」問題をめぐる国会の証人喚問で、首相側証人の籠池氏が昭恵夫人から受け取ったと証言した100万円に関し、安倍首相が野党の追及をかわすために使った文言です。安倍氏はあきらかにゴマカシのために使っています。古賀氏も反対論をはぐらかせるためにこの言葉を使っているのでしょうか。

このところ「ポスト真実」がトランプ問題を含めマスコミを賑やかさせています。古田史学を名乗る人たちのどの説が「正しいか」「間違っているか」について、「ウソかマコト」の視点から整理して見ました。マスコミを賑わせている議論を整理すると、一つは「あることを無いとする」ウソ、もう一つは「無いことをあるとする」ウソ、の二つに分かれるとおもいます。そして古田先生の方法論に従えばどのようなようになるのか、見ていきたいと思えます。

<古田先生の考え方>

先生は「わたしの学問研究の方法について」『邪馬一国の証明』(角川書店、1980年)において、邪馬台国は大和か九州か、正しい説の見分け方として、「その本の書かれている方法に注目し、その著者がどのような方法で、その結論に到達したかを比べる。そうすれば、まちまちの「結論群」の中から、どれが自分の納得のゆく方法で導かれたものか分かるようになる」とされています。TVを賑わしている人々はそれぞれの場面でどのような対応をしているのでしょうか。

<在ることを無いとするウソ>

TVで大きく取り上げられた籠池問題、加計学園については、安倍首相の介入が在ったのかどうか、が議論の焦点です。これは昭恵夫人と財務省、文科省を徹底調査すればわかることです。現在、安倍官邸・与党側はこの調査を拒否しています。これは首相の介入が

在ったと考えざるを得ません。

古田先生が提唱された「九州王朝」の存在も、古代史学会が欧米の歴史学会などで採用されている当たり前の実証的な学問研究の方法を採用して真面目に取り組めばすぐにわかることです。ところが学会は古田説の無視を決め込み、あいかわらず『日本書紀』中心の歴史認識にたっています。「九州王朝」は在ったのです。

「上町台地の難波・難波津」については大阪市がここ50年ほど多額の資金と沢山の人の投入して調査しています。結果「前期難波宮」については、何とかコジツケのような形ですが結果を報告しています。ただそれ以前の「上町台地の難波」についての実証はされていません。「難波津」については、証明するものは何も出土していません。大阪市、大阪市立大学の考古関係者がこれだけの「ヒトとカネ」をつぎ込み長年調査すれば、もし「難波・難波津」が本当に上町台地に在ったとすればその証拠はすぐに見つかるはずですが、七世紀中頃より前の上町台地に「難波・難波津」はなかったのです。

<無いものを在るとするウソ>

このウソを検証するのは大変な労力がいらいます。ヒットラーのウソは欧州が焼け野原になってからようやく証明されました。しかし失ったものは余りにも大きなものでした。大日本帝国における「神国日本」というウソも、数百万の国民の犠牲のあと、戦後ようやく明らかになりました。

最近では英国のEU離脱選挙において、ウソでかためた離脱派が勝ちました。トランプもウソの情報を大量に流し大統領選挙に勝利しました。しかし米国・英国民ともによりよくそのウソに気が付き自分たちの選択を後悔し始めたようです。

「古田史学の会」の「難波宮副都説」も古賀氏が提唱してから10年が経ちました。この間大阪市の考古学関係者が多大な工数をかけて上町台地の調査をしていますが、七世紀の上町台地に「九州王朝の副都」があったことを証明するものは何一つ見つかっていません。このため「副都説」は「書紀」の安易な記事年代の移動や文言の改竄、そして仮説の重層により「副都説」を補強せざるを得なくなるという、負のスパイラルに陥っています。

それでも「古田史学の会」は一方的にブログ洛中洛外日記で「難波宮副都説」を流しています。古賀氏は反論を歓迎すると繰り返していますが、洛中洛外日記には古賀氏だけの発信が認められ反論は許されていません。また会報には「副都説支持」の論文ばかり掲載されています。戦前の日本・ヒットラー、最近のトランプ陣営の情報戦略と同じ手法です。これらのことから「難波宮副都説」も「無いものを在った」とするものと考えたほうが自

然だと思えます。

「無いものを在るとする」論を検証することは大変難しいのですが、今回は「副都説」のウソを示す具立来な事例を紹介したいと思います。

2017年6月12日(月)

## コメント

追記：「副都説への疑問」(二)「悪魔の証明」について

6月12日付題記に下記項目を追記します。

<意味のない論争>

2010年に小生がまだ「古田史学の会」の全国世話人をしていた時、九州王朝から近畿天皇家への政権交代が“禅譲か放伐か”をテーマとしたシンポジウムが行われました。この時のパネラーは水野、古賀、正木、西村氏でした。

このシンポジウムに先立ち、琵琶湖を見下ろすK氏の別荘で会員有志による雑論会が行われ古田先生も参加されました。この時先生は「“禅譲放伐”とは戦国時代の孟子が定義づけたもので、中国国内だけを舞台として抗争が行われていた時代に作られた言葉です。ところが九州王朝から近畿天皇家への政権交代が起きた七世紀末は外国勢力の介入という問題が起きています。そしてこの時の政権交代は唐の意向により行われたもので、外国からの干渉がなかった孟子のころとは環境がまったく違っています。違う環境で作られた言葉を、別の環境下で起きた事象に当てはめ、解釈しようとしても意味がありません。言葉の定義を大切にし、正しく言葉を使って議論を進めなければいけない」と言われたように記憶しています(木村賢司「禅譲放伐」古田史学会報98号)

この時、古田先生の指摘を無視するように「古田史学の会」の“禅譲放伐シンポジウム”は行われ、結果はわけのわからないものになりました(古田史学会報100号に要旨掲載)。

これと同じように「副都説論争」も前提が間違ったもので、我々はわけの分からないものに時間を消耗してしまっているのではないかとふと思いました。

(特記事項)

会報100号の禪讓放伐論争の要旨には、当時の水野代表が「仮説というのは学問ではない、仮説として発表するのは自由である。それを学問として「古田史学会報」などに掲載するのは別問題である」と発言されたことが記されています。この時点で「古田史学の会」のトップはまだ古田先生の方法に忠実だったことが窺えます。

#### <副都説の実態>

「副都説」の構造をよく見ると二つの部分に分かれます。

一つは七世紀に作られた上町台地の遺構が孝徳紀の時代の宮か、それとも天武時代の宮かという問題です。

二つ目は七世紀の九州王朝の支配区域の実態です。はたして畿内までが九州王朝の直轄地域となっていたのか、それを文献からまた考古学的に証明するものがあるかという問題です。

古賀氏はまず、九州王朝の直轄地が畿内まで及ぶとして、つぎに難波宮遺構が孝徳期に作られたものとして、「副都説」を展開しています。ところがよく考えてみると二つとも仮説（思いつき）で、まったく実証されていません。「副都説」は二つの仮説を組み合わせ、それを出発点として展開されているのです。2010年当時の水野古田史学の会代表は一つだけの仮説の話でしたがそれでも「仮説というのは学問ではない」と断言されています。

常識からいって、古賀氏はまず七世紀九州王朝の直轄地域が畿内まで及んでいたことを立証し、それから上町台地遺構が九州王朝の副都だったという説に至るべきだったのです。

「副都説論争」について古田史学の会のメンバーに聞くと、多くの人から「よくはわからないけど面白いし、古賀さんがいっているから正しいのではないか」との言葉が返ってきます。なぜ「わからない」のか、これは「副都説」というものが“二つの仮説（思いつき）”を組み合わせるとリックのように論を進めているためではないかと思います。

古田先生は九州王朝の中枢部は神籠石に囲まれた太宰府と筑後川流域そして豊浦宮（山口）までの範囲とされています（「序九州年号論」『九州年号の研究』古田史学の会編、ミネルヴァ書房、2012年）。古賀氏は古田先生の「九州王朝直轄地域」の定義を否定する根拠と、直轄地域が畿内まで及んでいたことをまず論証すべきです。いままでそのような古賀論文は見たことがありません。

あいまいな前提条件で作られた「副都説」をテーマとして議論するのではなく、本質的な問題を適確に捉えて議論を進めなければ、「禪讓放伐」論争のような意味のないものになってしまいます。

投稿： 大下隆司 | 2017年6月13日(火) 19時47分

「副都説論争」について古田史学の会のメンバーの多くが「わからない」「古賀さんが言っているから良いのじゃない」との反応が返ってくるのは、「副都説」が何重もの仮説をくみ合わせてトリックのようにできているからだけではなくて、古田史学の会のメンバーの多くが、古田さんの実証主義歴史学の方法を理解していないからだと思います。

理解していたら、仮説と思ひ込みだらけの説であることは、一読しただけでわかり、大下さんの古賀説批判を読めば、ストンと納得するはずです。

<「副都説論争」も前提が間違っただけで、我々はわけの分からないものに時間を消費してしまっているのではないかとふと思いました。>

これは違います。「副都説」のような実証主義史学とは正反対のものが古田史学の中から、それも古田さんの愛弟子とでもいう人たちの中から出てきたことは必然の産物です。

なぜか。

古田史学の会の性格は、基本的には古田ファンの中の古代史を研究してみたい人が集まったものです。そして古田さんは会員ではないし、古田さんが会員を指導して歴史研究を行う実践的講座みたいなものも開催されていなかったのだから、会員は、じぶんなりに古田さんの本を読んでその方法を理解し、真似して研究してきたというのが正確なところだと思います。だから古賀説が出てきて大下さんがそれを批判し、それでも古賀さんが批判を受け入れず、会員の多くが「わからない」「いいんじゃない」との反応を示すから、大下さんが古田さんの著書を抜粋して、実証主義歴史学の方法とはどういうものかを論じなければならなかったのです。

ではなぜ「副都説」は生まれたか。それも古田史学の会の中核から。

一つは古賀さんも古田さんの歴史研究方法をきちんとは理解していなかった。たんなるまねのレベルであったと思います。2000年より前の古賀さんの論考の中にも、しばしば「これはおかしい」と思う方法論の誤りが見られますから。

二つは、古賀さんは会の発足以来事務局長で、その前の市民の古代研究会の時代の事務局長で、この会の分裂を中核で経験したぶんだけ、古田史学の会を、そして古田さんの「九州王朝」説を守らなければとの決意の固い人です。

だから誰よりも早く、大阪歴博の、「難波宮遺構下層宮殿遺構」が7世紀中ごろの孝徳の宮であるという学説が気になっていた。ブログで詳しく開陳されているように、この宮がもし本当に朝堂院様式で大極殿もある、中国の天子の宮をモデルにした宮であったなら、そしてこれが7世紀中ごろのものであったなら、古田さんの「九州王朝」説を根底から覆しかねないものである。古賀さんはこう考えたわけです。だから必死で勉強した。そしてもしかしたらこれは、九州王朝の都なのではないかと考えた。なぜなら7世紀中ごろは白村江前ですから当然九州王朝が列島宗主権を持っていた。ならば分国の王にすぎない近畿

天皇家に、中国の天子の宮の様式の宮建設を許すはずがない。でもそんな宮があればそれは、九州王朝の宮の一つだ。こう考えて「副都説」は出てきたわけです。

本来はこの仮説を思いついたとき、本当にそうなのか検証しなければいけなかったのです。確実な事実に基づいて。これは大下さんがすでにご指摘になった通りです。

だが古賀さんはそれをせず、大阪歴博の発表の基本を正しいと盲信して、この仮説をどんどん進めてしまった。そして古賀さんの悪い癖ですが（古田さんからしばしば指摘注意を受けたとブログにあります）、史料根拠なしについつい思い付きを発表してしまう癖がありますので、これをまず「洛中洛外日記」でやってしまい、例会で発表してしまったわけです。

ブログによれば古田さんは「本当に難波宮遺跡下層宮殿遺構」に「大極殿」はあったのかと何度も尋ねられたと。古田さんは大阪歴博の発表を疑ったわけです。考古学は遺跡という実物に基づきますが、しばしば残存状況が悪いので、学者が推定復元します。この推定の過程で、最初からこれは日本列島の王者である孝徳の宮だと思い込んでいけば、朝堂院形式と思われる遺跡が出てくれば大極殿があるのは当たり前と考えて、わずかな痕跡からこれを推定復元してしまう可能性があるからです。古田さんはまっとうな疑問を出したわけです。古賀さんは本当に出たのですよと何度も説明したそうですが（本当にそうなのか。一度報告書で確かめねばと思っています。古賀さんは読み間違いをよくするということは国分寺研究でわかっていますので）。

そして会員から促されて会報にもそのまま発表してしまった。

でも正面から批判したのは大下さんおひとりだった。そして論争はかなり専門的なレベルなので、いろいろ調べなければいけないし、二人の論争を聞いても知識不足で、しかも古田さんの実証主義史学の方法論を正確には知らない人では、論争の意味もわからない。

そのうえ古賀さんが、批判を真摯に受け止めて自説を再検討するのではなく、ついに大下さんを事実上会から排除する挙に出してしまった。きっかけは大下さんが、古賀さんの方法は古田史学ではないと発表したからです。まっとうな批判でも、自説にこだわり、自分こそが古田史学を防衛する人間だと思い込んでいる古賀さんには、大下さんの批判をまともに受け止められる状態にはないのでしょう。しかも古賀さんを応援して次々と補強の説を出す人がでてくるのですから。

こうして「副都説」がまるで古田史学の会の定説のような様相を呈することになったのです。

今初めて、古田史学の会の人々は、古田さんの学問の方法とはどんなものなのか、論争を通じて学び始めているのだと思います。

これは古田史学の会が、古田ファンクラブのレベルから、真の古代史研究者の集まりに脱皮するためには、不可欠の必然的な階梯なのだと私は考えています。

無駄な時間などお考えにならず、論争相手にも常に敬意を払いながら真摯に学問研究を進めていきましょう。大下さんや上城さんや私だって、まだまだ本当の意味で古田さんの

実証主義歴史学の方法を理解し、それを正しく使っているかわからないところが多々あるのですから。

投稿：川瀬健一 | 2017年6月14日(水)12時15分

大下さん・上城さん・ブログをご覧になっているみなさんへ

この前の私のコメント（「副都説」出現は、古田ファンクラブである古田史学の会にとって必然的である）と、その前の大下さんのコメント（「副都説」などくだらないものに時間を取られている）が、完全に埋もれて忘れ去られているので（私が「大論文」を出したせいですね）あえて、ここに再びコメントしておきます。

私の「孝徳の宮」についての論考に対する大下さんの疑問を見ていて、大下さんでさえも古田さんの方法論をきちんと理解しないで自分の想いで史料解釈をしていることがよくわかりましたし、大下さんでさえも古田さんの説の完全な理解に至っていないことは「失われた九州王朝」を再読してみてよくわかりました。

この本の古田さんの認識は、「磐井乱」を近畿天皇家による「九州王朝」への介入としたところと、多利思北孤の国書の国名が「大倭」だったろうとしたところが誤っているだけで、あとはとても緻密な分析です。特に近畿天皇家が隋王朝に対して使節を送って朝貢したことは、九州王朝が隋と対抗して国交を絶ったことと対照的であり、この時の近畿天皇家の国書の内容と、九州王朝の国書の内容が対照的であることが印象的です。近畿天皇家はこの時倭国天皇と名乗っています。ということは多利思北孤は、日本国天子と名乗っていたのでしょね。だからこれに怒った隋王朝は、「日本国天子」を認めず、「隋書」の日本の国名も従来の「大倭国」のままとされたのだと思いました。

九州王朝は、6世紀初めの磐井の時代からすでに「日本天皇」を名乗り、隋王朝ができた際には、同じ蕃夷の王同士との観点から、自らも天子を名乗ったのでしょね。これに対して分家の近畿天皇家は隋王朝に従う動きを見せ、「倭国天皇」と名乗った。7世紀初めの時点ですでに、近畿天皇家は九州王朝から自立する動きを見せ始めたのです。

このことはきっと近畿天皇家内部に深刻な分裂と軋轢を生んだことではしょね。

これが7世紀に近畿天皇家内部に激しい内部対立が渦巻いた国際環境だと思えます。

ここを押えれば、当初は協力関係にあった孝徳と中大兄が敵対関係になった理由もおのずからわかりますね。孝徳は中国との対抗関係に動く九州王朝を支持。中大兄はこれに反対して自立の動きを取ろうとする。だから孝徳は中大兄派の蘇我倉山田石川麻呂を「謀反」の罪でうち滅ぼし、中大兄はこれに反対して「倭京」にもどるといって、母や妹そして弟さらには群臣をつれて飛鳥に戻ってしまった。この結果病となった孝徳は「日本」難波宮に死す。

その死後、皇極が再び踐祚し、そのもとの九州王朝に従う路線を継続しようとした孝徳の息子有馬を「謀反」の罪で滅ぼし、中大兄は近畿天皇家を自立派で固める方向に動き出す。

しかし九州王朝は、新羅・唐が連携して百済を滅ぼしさらに高句麗も滅ぼそうとする中で百済再興に乗り出し、決戦を前にして近畿天皇家にも九州への出陣を促す。

九州王朝と敵対する決心ができない中大兄は母とともに群臣を率いて「日本」へ唐との戦に備えて出陣するも、母の死に会い、これを口実として全軍を「倭」の飛鳥に引き上げる。

同じように九州王朝が唐と激突を迎える中で、この王朝に従って唐と戦うのか否かが、列島各地の王たちに突き付けられ、さまざまな軋轢が各地に生まれたことでしょう。

そして九州王朝は完敗し、首都も唐軍に占領される。これにより列島各地の王権内部に、唐に従うのか否かが去就を問われる課題として突き付けられた。

この結果起きた近畿天皇家の内乱が、壬申の乱であり、勝利した天武は、唐に従う路線をとり、最終的に唐王朝は、自国に従った天武を頭とする近畿天皇家を日本列島の代表王朝と認めた。

6世紀初頭から8世紀初頭の状況を以上のように理解するべきではないかと考えました。

（「法華義疏」の「大委国上宮王」の記述ですが、写本では「大委上宮王」であり、国の字は、その右わきに小さな字で書きくわえてあることに気が付きました。つまり「大委上宮王」が正しい。これは国名だと判断した人があとで国の字を挿入したとみるべきでしょう。では「大委」とは何か。これは「大倭」であることは確実。でもこれは国名なのか。もしかしてこれは官職名ではないのか。魏志倭人伝では「使大倭監之」の一文がある。「大倭」は国々の市や交易を監察する役。

「法華義疏」の「大委上宮王」とは、上宮王が天子になる前の時期の官職名を、自らが編纂した書に書いたものだったのでは。古田さんの本を精査してみますが、今のところこう考えている。

となると上宮王は多利思北孤なのだから、彼の時代は倭国はすでに日本国と国名を変えており、彼は隋王朝に対して日本国天子と自称したと考えて間違いありませんね)

投稿：川瀬健一 | 2017年6月18日(日)12時25分

川瀬さんへ

6月18日付の貴信につき下記します。

<推古紀の中国への献使>



古田先生は「推古朝の対唐外交」『法隆寺の中の九州王朝』朝日新聞社, 1985年において、推古天皇の使者の行き先は「隋」ではなく「唐」であったと、論証をされています。小生はこの論証は史料根拠がはっきりし、内容も分かり易く間違いないと考えています。

< 5世紀末から7世紀の畿内の状況 >

『古事記』によると、河内平野に巨大古墳を築いた王朝は、相次ぐ内紛で皇位継承者すら探しだすのに苦労し（仁賢・顕宗）、そして武烈の時に滅びます。このころから畿内の古墳も小さくなります。6世紀には継体がやってきて、即位をしますが、大和に入るまで19年を要しています。

その後、安閑、宣化、欽明と続きますが、『日本書紀』には特筆するような記事はありません。欽明紀などは九州王朝から盗用した朝鮮半島記事で埋まっています。この時代に天皇家が畿内を統治できていたか疑問に思っています。

その後は蘇我氏が物部との戦いを制し、天皇家の外戚として畿内の支配者となります。蘇我の繁栄を示す遺跡が飛鳥地方から出土しています。近畿天皇家が権力を握るのは乙巳の変（645年）になってからです。しかも数年は内部抗争が起き、権力基盤は盤石ではなかったと思います。川瀬さんが指摘される七世紀前半に天皇家はまだ脆弱で九州王朝からの独立の動きを示すものは何もないと考えています。

投稿： 大下隆司 | 2017年6月19日（月）20時36分

川瀬さんへ（訂正）

6月19日付け投稿の末尾で、「七世紀前半に近畿天皇家が九州王朝からの独立の動きはない」としましたが、これは取り消します。推古朝が遣唐使を送ったことは、九州王朝からの独立の動きです。

この頃までに蘇我氏を中心に飛鳥の開発が進んでいます。そして大和の勢力が河内の物部を倒し、飛鳥が畿内の政治の中心になってきます。

力を付けてきた推古朝が唐との接触を図ったと見るべきですね。

投稿： 大下隆司 | 2017年6月20日（火）08時30分

大下さんへ

古田さんの「推古朝の対唐外交」『法隆寺の中の九州王朝』朝日新聞社、1985年の所在を御教え頂きありがとうございます。確かに古田さんはここで前の『失われた九州王朝』での説を変更しています。これは当時読んだ記憶があります。でもその時は、どうしても書紀記事が12年繰り上げられているという古田さんの見解に納得がいかなかったことを記憶しています。だからずっとこれを私は採用しなかった。

再度精読してみます。『失われた九州王朝』の論の進め方と比べながら。どこか違和感があったと記憶しているので。12年繰り上げ以外にも。

<5世紀末から7世紀の畿内の状況>については、まず『古事記』の当該の時期の記述と、『日本書紀』の当該の時期の記述を精読してみます。古墳の状況はひとまず置いておいて、文献史料だけでどう読めるかを確認します。そのうえで考古学史料とも突き合わせる方法で。本当に応神に始まり武烈に終わる王朝は河内に巨大古墳を築いた勢力であったのかどうかも、文献でそう読めるかどうか確認してからです。天皇陵はそう伝承されただけで確証はありませんから。

私たちが読む古代史の本の多くは近畿天皇家一元史観の史料の扱いがいい加減なもの。その諸説の影響を私たちは無意識に吸収していますので。まず一次史料の精査が不可欠だと思います。

投稿：川瀬健一 | 2017年6月20日(火) 22時57分

### 「副都説への疑問」(三) 最新の古地理図情報

古田史学会報107号の「古代大阪湾の新しい地図」において、新しい上町台地の古地理研究に基づき、「難波(津)は上町台地になかった」を報告しました。今回はその後の上町台地周辺部分の調査がまとめられ、大阪市文化財協会の趙哲済氏より発表されましたので、難波宮副都説に関係する部分を紹介します。

発表資料：趙哲済「大阪湾沿岸低地における古地理の変遷、その最新情報」大阪歴史博物館講演、2017年5月14日

### <豊崎神社の地は水に洗われていた>

古賀氏は洛中洛外日記1041、1402話において「孝徳天皇の難波長柄豊崎宮は、現在の豊崎神社のあるところ」としていますが、5月14日の趙哲済氏の報告によると次のようになります。

①豊崎神社周辺の出土遺物：弥生時代の古土壌と同時期の遺物を含む河川成層が分布しているが、この地域における出土遺物は古墳時代前期初頭までで、地層の分析から古代（飛鳥時代）には流路が変わり中津川がその地域に流れ込んでいることが分かった。

②古代の海岸線：古代の大坂湾は大きく内陸に入り込んでいて今のJR大阪駅（梅田）のところがまだ海岸線にあった。

（肥沼さんへ：地図を別途送りますので、PCの修理が終わったら掲載下さい）

当時の豊崎神社のところは海拔0メートル地帯です。上流で大雨が降れば洪水、海上が荒れれば高潮となり絶えず水の恐怖にさらされる場所です。

このような所に大王の宮が作られるのでしょうか。また大阪市文化財協会の調査ではこの地域で7世紀の出土品は見つかっていません。

孝徳天皇の宮は上町台地の北、現在の長柄豊崎と呼ばれている所には「なかった」のです。

古賀氏は1990年に出版された、大阪市文化財協会の冊子『葦火』の記事を根拠に自説を展開しています。たしかに大阪市文化財協会は、1990年の時点では「上町台地西側の砂州が北の方へ連続してつながっていた」と日記1402話に記されているように認識していました。しかし会報107号で説明したように2000年代に入ると、大阪市文化財協会の認識は「上町台地の北側には淀川と大和川を合わせた河内湖の水が流れていた」に変わっています。そして今回北側低地の状況がもっとクリアーになったのです。

論は事実に基づいて立てるべきです。しかしこれらの事実も「実証より論証」ということで無視されるのでしょうか。

<肥沼さんへ>

本件新しい項目を立て移して下さい。

投稿： 大下隆司 | 2017年6月22日(木) 21時41分

大下さんへ

古田さんの「推古朝の対唐外交」『法隆寺の中の九州王朝』朝日新聞社、1985年を読みました。

たしかに書紀推古紀中国との外交記事の相手国は唐であり、使節の官職名も隋の時と異

なり、中国の天子の国書の内容も、唐の初代高宗の時と考えるとぴったり。

書紀編者が編集集中に年代を誤って 12 年遡らせてしまったという古田さんの論証は正しいと思います。

それでもまだ疑問があります。

本当に推古時代の近畿天皇家は中国に直接通交を試みなかったのかと。

古田さんの前書「失われた九州王朝」で推古時代の近畿天皇家が隋と通交したとの論の最初のきっかけは、書紀の記事ではなく、『隋書』の記事にありました。

それは『隋書』「倭国伝」では、大業に隋の皇帝煬帝が文林郎裴清を倭国に使わして様子を探らせ、彼の帰国に伴って倭国の使者が方物を買いだとある。そしてその次に「この後絶つ」とある。

しかし『隋書』の帝紀3 煬帝上にこの記述に反すると思われる記事があるということでした。

その記事とは、

「大業四年 三月壬戌，百濟、倭、赤土、迦羅舍國並遣使貢方物。」

「大業六年春正月己丑，倭國遣使貢方物。」

の二つの記事だ（大業四年の記事を「失われた九州王朝」の本では、大業四年二月 と誤記している）。

列伝では「倭国」とあるのに、この「倭国」とは何か。そして大業六年とはすでに倭国が通交を絶ったあとではなかったか。

これが古田さんが「推古朝の対隋外交」というのちに否定した概念を提起した初めでした。

しかし『古代は輝いていたⅢ 法隆寺の中の九州王朝』の「推古朝の対唐外交」では、この『隋書』帝紀にある「倭国」の記事についてはまったく触れられていません。

隋の煬帝が文林郎裴清をおくったのは大業四年のいつのことか。そして文林郎裴清が使者を伴って帰国したのはいつのことか。これらが『隋書』では全く記述されていないので、先の大業四年三月の記事と、大業六年正月の記事とこれを照らし合わせるができないのも確かですが、明らかに国名が違っている。

この帝紀の「倭国」が推古朝である可能性はまだ残っていると思います。

以上検討した結果です。

投稿：川瀬健一 | 2017年6月24日(土)16時53分